

## (1) 文化

フィリピンにスペイン人が渡来したのは16世紀前半であったが、当時のフィリピンには、マレー系文化と中国、インドなどの文化が混ざんとしていたと言われる。その後、4世紀にわたりスペイン次いでアメリカの植民地となったこの国では、今日でも混合文化がその文化の中心になっている。しかし、近年ナショナリズムが強まるなかで民族的性格が文化的にも強調されつつある。また、上記の混合文化とは別に伝統的な文化、風俗などを少数民族に見出すこともできる。

### ① 美術

全国に約80の美術館があり、首都圏だけでも40ほどの美術館がある。主なものとして、zなどが挙げられる。スペイン統治期の美術には、宗教関係のものが多く、サン・オーガスチン教会などに労作が多く残されている。絵画の分野では、19世紀後半にホアン・ルーナとヒダルゴが国際的に認められ、今でも展示会が開かれている。ついでデ・ラ・ロサが現れ、彼の甥のフェルナンド・アモルソロも人気を博した。

### ② 文学

フィリピンの文学作品は、この国の歴史を反映して、スペイン語、英語、タガログ語、その他の地方語によって書かれている。フィリピン独立の父と言われるホセ・リサールの「ノリ・メ・タンヘレ」や「エル・フィリブステリスモ-反逆・暴力・革命」はフィリピン文学の古典と言われている。

ホセ・リサールはフィリピンの国民的英雄として有名である。彼は医師であり、語学の天才でありまた、詩人であり、小説家であった。彼は、祖国フィリピンの人びとの幸福を願い、その思いを小説に託した。「ノリ・メ・タンヘレ」は、「我に触れるなかれ」という意味のラテン語である。年にベルリンで刊行されたこの小説の目的は、当時当然のように考えられていたフィリピン人、フィリピン文化の劣等性を否定し、自民族の将来の向上を旨とするものであった。

現代文学は、短編に見るべきものがあると言われている。邦訳されているものは、上記リサールの文学の他に、ゲリラと日本軍に協力する警官とに引き裂かれ戦わざるをえなくなった3人のいとこ同士の若者たちを描いた「暁を見ずに」（ステヴァン・ハヴェリャーナ）をはじめ、「マニラ・光る爪」（エドガルドレイエス）、「仮面の群れ」、「民衆」（フランシスコ・ショニール・ホセ）などがある。

### ③ 音楽

フィリピン人は音楽好きである。フィリピンは、「世界で一番ミュージシャンが多い」といわれる。ただし、長年のスペインやアメリカの支配の影響で、独自性を持った音楽が育たなく、多言語国家ということもあり、スペインの影響を受けたラテン音楽か、アメリカ発の英語の曲が主流である。年代にフレディ・アギラの「Anak」がヒットすると「OPM（オリジナル・フィリピン・ミュージック）」と呼ばれるタガログ語、あるいは英語のフィリピン発の音楽が出るようになり、今ではひとつのジャンルを形成している。しかし、街にいてもOPMより、アメリカのヒットチャートを耳にする機会の方が多く、アメリカ

の音楽が浸透しているのが現状である。一方、フィリピンでは、ラジオなどでクラシック音楽を聴く機会があまりない。

#### ④ 舞踊

1996年に建設されたフィリピン文化センター（CCP）は、フィリピンの文化の中心として各種文化の紹介、公演などを行っているが、特に音楽舞踊の公演会場として活用されている。フィリピンには、山岳民族のもの、スペインから伝わったもの、イスラム教の影響を受けたものなど様々な民族舞踊がある。

中でもレイテ島の「バンブー・ダンス」（正式名：ティニクリン）が有名。これは穀物にいたずらする雀を2本の竹で捕まえようとする様子を表現したもの。パンダンゴ・サ・イーラウは、ミンドロ島の比較的ゆっくりとした三拍子のダンス。女性が、灯したろうそくのに入ったグラスを手と頭に載せて、巧みにバランスを取りながら踊る。

#### ⑤ 映画

フィリピンでは、映画が大衆の娯楽である。1本60ペソ～120ペソ程度で見ることが出来る。英語圏なので、アメリカ映画も字幕なしで上映される。また、タガログ語のローカル映画産業も盛んである。フィリピンは20世紀前半アメリカに支配された影響で、映画製作においても、プロデューサー主導、マーケット・リサーチ、スタジオ・システム、スター・システムといったアメリカン・スタイルがこの時期に定着した。それが現在、逆に映画産業の強みになっている。

2001年に福岡アジア文化賞を受賞したフィリピンを代表する映画監督であるマリルー・ディアズ・アバヤの代表作「ホセ・リサール」は、1998年に同国の映画史上最高の観客動員を記録した。

前大統領のエストラダも映画俳優出身で、大衆の支持を得て大統領になった経緯がある。

#### ⑥ スポーツ

フィリピンには、IOCの下部組織POC（フィリピン・オリンピック委員会）があるがこれとは別の政府機関としてフィリピンスポーツ委員会が各分野の有望選手の育成を行っている。フィリピンで最も人気のあるスポーツは、バスケットボール。バスケットボールはフィリピンの国技と言われており日本の野球に匹敵する人気を持つ。PBA（フィリピン・バスケットボール・アソシエーション）は1975年に結成され、30年以上の歴史を誇るプロ集団である。現在、Alaska Aces、Barangay Ginebra Kings、Batang Red Bull Thunder、Mobile Phone Pals、Pop Cola Panthers、Sta. Lucia Realtors、San Miguel Beermen、Tanduay Rhum Masters、Purefoods TJ Hotdogs、Shell Turbo Chargersの10チームが、年間3シーズンを戦っている。また、アメリカのNBAも人気が高い。他のスポーツでは、テニス、ゴルフ、ボウリングがこれに続く。ボクシングや空手も人気がある。

⑦ フィリピンの言語 フィリピン諸島では、87の方言が地域によって使われている。代表的なのは、ルソン島北部のイロカノ語、ビサヤ諸島のビサヤ語などがある。1936年からは、マニラ首都圏近郊の言語であるタガログ語が標準語とされた。現在は、全人口の約50%程度にタガログ語が浸透している。英語は、教育や商業活動における共通語として使わ

れており、全人口の約80%が英語を理解する。特に都市部の中産階級以上の社会では学校・オフィスにおいて利用されている。タガログ語と英語はしばしば混合して使用される。これは双方の言語の文法が似通っており、文型を変えずに単語を入れ替えることができるためである。

#### ⑧ フィリピンの民族・人種・社会階級について

フィリピン民族は、固有の人種から構成されているのではなく、人口の大半はスペイン植民地時代以前から移民してきたアジア系黒人およびマレーポリネシア系人種によって占められている（スペイン植民地：1563年～1898年、米国統治：1899年～1946年）。

スペイン植民地化以前のフィリピンはイスラム国家であり、オスマン・トルコ帝国の連合国に属していたスルターン領の一部であった。その文化の名残りがフィリピン南部地域民族の一部に伝承されている。

フィリピンの社会階級制度は、スペインによる植民地化にその源を発する。スペインは、当時中南米諸国に適用していた「エコンミエンダ制」という、スペイン人を頂点としその血統の濃さに従って社会階級を決め、土地を分け与えるという土地政策をフィリピンに持ち込んだ。（イスラムによる反スペイン地域を除く）現在においても18万人程度のスペイン人がエリート階級として存在し、広大な土地を所有している所以である。

一方で、スペイン植民地政府より商業活動特権を受けた華僑は約60万人で、フィリピン経済の約6割を支配していると言われる。彼らはマニラやセブなどの都市部に集中している。

家庭で使用されているフィリピンの代表的言語

使用地域	言語名	人口使用率 (%)
ルソン島中部（実質の標準語）	タガログ語	35.13%
中央ビサヤ地域	セブアノ語	13.75%
ミンダナオ島全域	ビサヤ語	8.70%
ルソン島北部	イロカノ語	8.68%
ビサヤ地域西部	イロンゴ語（ヒリガイノン語）	6.97%
ルソン島南部	ビコラノ語	4.61%
ビサヤ地域東部	ワライ語	2.74%
ルソン島中央北部	パンガシナン語	2.70%

出所：国家統計委員会（2000年）